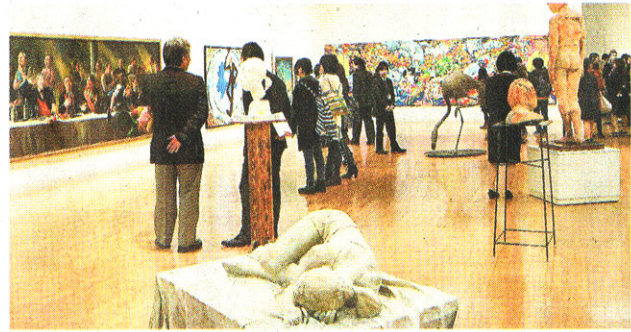


絵画や彫刻 伸びやかに



絵画や彫刻、プロダクトデザインなど、学びの成果を発表している崇城大芸術学部卒業展・大学院芸術研究科修了展＝熊本市中央区

彩な作品群。社会を見つめる視点を感じた。25、26日午後1時から、出品作について語るギャラリートークがある。入場無料。
(小野由起子)

崇城大芸術学部卒業・修了展

崇城大芸術学部卒業展・大学院芸術研究科修了展が22日、熊本市中央区二の丸の県立美術館本館で始まった。27日まで。美術学科・デザイン学科の学部生53人と大学院生9人が、絵画や彫刻、プロダクトデザインなど各1点を発表。学びの成果と表現への思いを發揮した、伸びやかで充実した作品がそろった。

美術学科は、古典絵画や幻想的なモチーフを引用しながら、自らのイメージを結実させた作品が目をつけた。視覚芸術コースの1期生、鈴木沙彩さんの大作「オニキス。」は出身地菊池の祭りを題材に、白龍や露店、風神雷神などのモチーフを極彩色でまとめ上げた絢爛豪華な「ネオ日本画」。大学院修士課程の富永健斗さんは、フラミンゴの具象彫刻で量感のコントラストを追求している。

デザイン学科では、男性向けのスカートやワンピースを開発して男女の性差を問うた益田笑利さんをはじめ、写真による死角の視覚化、もの与人をつなぐブランディングなど多